

時に佇つ

佐多稲子

河出書房新社

時に待つ

一九七六年四月三十日 初版発行

著者 佐多稲子

発行者 佐藤皓三

発行所 株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三一六

電話東京二九二・三七一一（大代表）

振替東京一〇八〇二 郵便番号一〇二

印刷 亨有堂印刷 製本 大口製本

定価は函・オビに記してあります

目次

その一	5
その二	17
その三	31
その四	49
その五	69
その六	85
その七	101
その八	121
その九	135
その十	147
その十一	165
その十二	185

装幀題字
本文カット

松田正平
芦川保

時に佇つ



高速道路の何号線なのか、日本橋あたりのビルの間を走ってきたのが、どこかで大川を越すと、まっすぐ川に添って上へ向かっていた。道が高いから、川幅と、向う岸の家並みの上に空がひろく見える。私は車の窓に顔を寄せるようにしてその眺めを見ていた。川のこちら側から浅草方面を見るのは初めてではないし、私にはむしろなじんだ風景なのだが、この高さから見渡すというのが珍しい。十二月半ばの空は薄く曇っていたが、丁度真昼どきの川の上には明るさがあって、小さな蒸気船が団平船を曳いたりしてのぼりくだりするのが昔のままのようで、のんびりとして見えた。

やがて吾妻橋へかかり、浅草寺の屋根も見つけたとき、隅田川の川面が急にはるかな向うまで伸びて見渡せた。私は思わず声を出して、にぶい銀色のその川面をたどった。それは、ゆったりとした川幅が、言問橋を過ぎ、白鬚橋を過ぎて、そのずっと向うで左に曲がってゆくあたりでは

せばまっで見えるほど先きまでつづき、そこでは兩岸はもう視野の外になって、白い流れの筋だけが空の間へ入っていた。この隅田川は、道路のこの高さによって、はじめて見ることできた姿であった。ずっと昔の墨田の土手であった頃や、その後の隅田公園の川ふちから眺めたときの川の土手はまっすぐにせいぜい白鬚橋まで、その白鬚橋さえ、ちょっと遠くに感じたものだった。今は隅田公園で川岸を歩いて、堤防のコンクリートの塀にさえぎられて川の眺めは見えもしない。隅田の堤から川面が見えないとは、なんたることとおこつてきて、今日も、日本橋の青銅の柱が、高い道路の間にはさまれて無惨に頭部だけのぞかせているのを、ちらっと見とめながら東海道五十三次の出発点を真下にして疾走するとき、またそんなおもいをしたのだ。それがここへきて、隅田川のおもいがけぬ眺めにすっかりいい気になっていた。隅田川の曲がって流れてくるのを見たのは初めてだし、それを遠く上へ見渡すと、東京の外まで眺めたようで、広い地図を見るようであった。しかしその眺めもいつときで、私たちの車は、高速道路から向島の街中へおりに行く。私はこの日、その向島に仕事で、榎卓也の旧蹟をたずねようとしていた。この作家は私の若いときの友人でもあった。彼は私と同年だったが、戦後の荒廃のまだすかりは落ちつかぬ頃に、長い病気のあとで亡くなったのである。彼のことを私は友人と云ったが、若いときの私にその資格はなくて、本当は、彼の方の、そんな私に対する親切な配慮と導きを、深い友情として私が受けた、というべき交りなのであった。彼の若いときの文学仲間のそばに私がいて、その仲間たちのみずみずしい息吹きに私が洗われていたときである。その頃榎はこの向島の父の家にい

た。私も、彼にフランス語を読んでもらうために、何度か来たことのある家で、それが現在もある。今日はその家を訪ねるといふ用事であった。私にとつては、若い日のなつかしさとともに、自分もかつてそれ以前に同じ町内に住んでいたという縁があつて、自身の古巣へ行く気持にもなっている。が、向島小梅町が今は向島何丁目となつて、町の様相もすっかり變つてしまつてゐるのを知つていた。二年ほど前に一度このあたりを歩いたことがある。自分の住んだ家の場所はおおよその見当でわかつたけれど、槇の家は遂に探し得なかつた。今日はこの仕事の編集の人に案内されている。

車は、ブロック壁の二階家が道に添うように窓や入口を並べてつづいてゐる、狭い片側道へ入り、ひとつの角でとまつた。片側の一方は隅田公園の植込みになつていて、その蔭でひんやりしたように、ひっそりした道であつた。

「ここですか？」

と私は立ちどまつて首をかしげた。

「そのはずですよ」

と連れが云う。

「ちがいますよ」

と、私はなお、はっきりそう云つて、かつて来たことのある槇の家をおもひ浮べる。それはもつと道幅もひろく、町内の活気も伝わっている明るい通りであつた。しかしそれは永い年月のう

ちに、記憶の中でいつか変っていった、そのまま私の形づくってしまったもののだろうか。それにしても、私のうちに浮び出るその家と町の雰囲気は、鮮明に完成されている。それはずっと長い間、私の抱きつづけてきた心の中の写真である。が、そんな私の固執にもかかわらず、やはり槇の家は、この並びの一軒だというのである。私はその家の前に立ってなおしゅんじゅんしていた。あのときの家は、今のような窓ではなかった。今も窓の前を隠すようにして八ツ手が植えてあるが、昔は往来に面して明るい障子が立ててあって、その前に篠竹の数本が植わっていた。家の入口も今のように閉ざしたふうではなく、左端にあったのでもない。もっと外にむかつて親しくて、その入口は家の真ん中にあり、篠竹を前にした座敷を右手に、そして左手の方には槇の父の仕事場があった。だから家の表側が今よりも広かった。

私の記憶は尚かたくなに、目の前の家を拒否しているが、しかしここが、かつての槇の家であることにはちがいないらしい。それは確かな証言もあることだった。何よりも表札に見える住居者の名前がそれをあかしている。今も、その家には、槇の縁つづきの人が住んでいて、私はこの家の主人に逢いに来たのである。前に通じてあって、その家では主人夫妻が私たちを待っていた。夫妻とも私と同年配位の、主人は白髪をきれいにかり込んだ、おだやかに、几帳面な人柄に見え、妻女の方は、今もまだ前かけをつけて掃除もするというような親しさで見えた。私は、訪ねてきた用事が、槇の話を聞くということであるのに、八ツ手の窓の部屋に通されるとまっさきに、家のもよう変えのあれこれを問うていた。それはもう四十数年の昔を引出すことである。しかした

しかにこの窓の前には笹があつたとのこと。それなら私の坐っているところが、檣に、メリメの短篇を読んでもらつて私がそのあとをたどつたあのときの部屋なのであろうか。そうおもふしかないが、実感をよびおこす手がかりはどこにもない。私はもう、私の抱いているあのときの部屋を胸にしまい込んだ。それはもう現存しないものだった。それなら一層、記憶は貴重になる。誰にとつてというのではなく、私自身にとつて、それは貴重になる。その意味は確かだ。あのときの私は、檣たちの文学仲間のひとりの妻であつて、そしてあまり、ものを言わぬ女であつた。檣の家のあの座敷で、つまり篠竹の葉が障子にふれていたかもしれぬあの座敷で、机を間に彼と向い合ひに坐つて、メリメを読んでもらうときや、その前後も、私は殆ど何もおしゃべりをしなかつたとおもう。そして彼もまた、あまり話をしなかつた。この座敷で、二人が何かの話をしたという記憶は、断片的にさえない。私は謙虚に彼の前に坐つており、彼はくぐもるような口調で、ときに何かを云うだけだったのだらう。私はきつと、フランスの作家を原語で読む、ということに、まばゆさを感じ、身体を固くしていた。私はそれまで、学業らしいものの教授を一度も受けたことがなかったのである。友人の妻であるそんな女に、外国語を読ませようとする檣の方には、どういふ思いがあつたのかは知らない。それは敢えて云えば、彼の「文学」であつたらうか。ある日は、左手の彫金の仕事場から、こちらへ出て来る檣の父の姿を見かけたこともある。檣の父は、私たちのかたわらを通るときさりげなくて、それは、檣と私のそんな、つつましく机に対座しているのを乱すまい、とする心づかいのように感じられた。私はおぼつかなく発音し、その外国の

言葉よりも、槇の翻訳する作品そのものの方に引かれているが、二人の間には、真面目な空気があったにちがいない。それは私にとって、ひとつの美しい時間であった。

しかし私が槇のその家へ通ったのは、ほんの数度に過ぎなかった。それは槇の方の都合によるのだったろうか。それとも私の方で外国語を覚えるという時間を失ったとでもいうのだったろうか。私はこの頃、友人たちの手引きでものを書き出していたが、同時に、生活の主調を傾向的にしているときでもあった。私の夫の吉之助は、求めはじめた思想的立場と、彼の若い意欲によって、労働運動の實際面に加わるようになっていく。そしてこの生活の変化は、私たちだけのことでなかった。それは社会の潮流の中にあつて、吉之助の求めた文学そのものが、左翼的な立場に移ってゆくことであった。彼ら自身の同人誌はとぎれがちながまだ発刊されていたけれど、一、二年前の集中的な雰囲気はもう失われている。同人のひとりが中心にいるプロレタリア芸術運動が一方で組織立っていて、もうひとりの同人もそこに入っている。そして私自身の、ものを書く立場もその中に加わるものなのである。

槇は、彼自身の立場において、同人たちのこの変化と、そして私のことを充分承知していた。だから、槇の私への援助は、私たちのあわただしくもある生活への援助でもあったのであろう。が私は、そのあわただしさで、それを消してしまった。フランスの作家を原書で読めたら、という大きな、いわば大それた私のものぞみと、外国語を知っていたら何かの時に役立つ、という吉之助の配慮とで始めたことだった。そして私の勉強は、ア・ベ・セの最初から、すべて槇の援助で

始まったのである。楨は、私たちのこのおもい立ちに、自分の期待さえかけたようであった。が私にそれはついに一語も残らずに終った。私と、私の周囲の力んだ空気の中でそれは消えていった。だから、楨に、あの座敷でメリメを読んでもらった、という思いだけが凝結している。それは私自身の大事なもののだ。

今、向島の家で私の坐っているのはあのときの座敷らしい。楨の父に若いときからついて、今は彫金の工場を持っているというこの家の主人は、昼休みをさいて私たちに楨の話をしている。楨に、母のことを書いた作品があるが、主人の話は私の中でその作品ととけ合って、少年のときの楨のおもかげになる。楨の母が特別のおもいで、楨を大事に、尊重するようにしていたというのは、この家の主人にもいちばん強く残っていることらしい。楨の母は、周囲の人に楨を、坊ちゃん、と呼ばせなければ気のすまぬ人だった、と主人はくり返して話す。そこにふくまれている事情を、私は楨とのつきあいのはじめから知っていたようにおもう。あの座敷で、楨と私が机にむかっていたかたわらを、彫金の仕事場から出てきて通ってゆくときの楨の父の、それとなしの心くばりにも私はそれを感じたとおもう。そして私はそのことに、人生的な優しさをも汲みとったようにおもう。楨という姓は、そのときの父の姓ではなかった。それは楨ひとりの姓であった。そこに内在する楨の事情を、私ははじめ頃から知っていたとおもう。あの頃の彼たちの仲間は、おたがいに自分の身の上も明かし合っていたのではなからうか。楨のことだけではない。他の同人たちの境遇や過去も、おおよそは私も聞き知っていた。それは私自身の経歴を、みんなが知っ

ているのと同じであった。おたがいの、そのようにすることは、語ることで自身の人生を客観化し、あるいはそれを分け合い、何かをくみ取ることだったにちがいない。おたがいの間でのそれぞれの境遇に対しては尊重といったわり合いがあって、その上でどんな些細なことにも意味を見つけ、それをおたがいに共通する基準によって美と醜とに分けるということだったろうか。私の境遇の特殊な変遷や、この過程での尋常ではなかった行為も、世間の判断とはちがうところで聞き取られた。と言っても私の場合は、みんなに私が身の上話をしたというのではなくて、夫の吉之助をとおしてみんなに伝わっていたものだ。そんなときみんなは、私の過去を素材にして、自分の見方を述べたかもしれない、あるいは、ふうん、と言って何か一言をつけ加えたかもしれない。それもまたあとで、吉之助から聞いたり、あるいは彼らから私の受ける感じの中によみとるものだった。だから、楨が私の身の上を知っているように、私も楨の事情を知っていた。楨の、柔かに落ちついた表情の中に、ひそかに何かの強さも打ち出している印象のうちに、彼の出生の真実を私などは定着させて感じていたようにおもう。

今、この家の主人から、楨の少年時代の話を聞きながら私は、一方でそんな、私の知っていた頃の楨をおもい出していた。先きに書いたようなことで私の生活が変わってゆき、それが一層鮮明になってゆくにつれて、楨とのつきあいの遠くなっていたことも。それは楨自身の世界が強固になっていったことでもあるけれど、なによりも私の生活のあわただしさのせいであつたろう。私はもう何年も楨に逢うことがなかった。逢うことのないまま、いつか私は、私の当時の生活の